

高等教育における「シラバス」はなぜ『重要』なのか

川 廷 宗 之

大妻女子大学名誉教授
職業教育研究開発推進機構・代表理事

Why the Syllabus is Important in Higher Education

Kawatei Motoyuki

Professor Emeritus of Otsuma Woman's University

Representative Director of Research, Development and Innovation Promotion Agency for Vocational Education and Training

Abstract : The biggest problem in modern Japanese higher education is neglect of the syllabus, which is a form of learning support. Instructors need to return to the fundamental point of learning how to facilitate the mutual development among life experiences, tacit knowledge, explicit knowledge. Furthermore, learning support must enhance learning outcomes through student-centered learning communities. Such learning support requires lesson planning that incorporates many elements. The syllabus should both be, based on this lesson planning, and communicate to students the benefits of taking the course, the enjoyment of learning, its effectiveness, and the self-learning tasks necessary to achieve these goals.

Key Words : syllabus, active learning, learning community, tacit knowledge, course design

抄録：現代日本の高等教育における最大の問題点は「シラバス」の軽視である。教員は、授業と言う学習支援において、生活体験⇔暗黙知⇔形式知の相互展開の行い方を学ぶという原点を踏まえる必要がある。さらに、学習支援を、学生中心の学習コミュニティを通じて行うことで、学習効果を高めなければならない。このような学習支援には、多くの要素を踏まえた授業設計が必要である。シラバスはその授業設計を踏まえ、学生にその授業を受講することのメリット、学習の楽しさ、有効性、及びそのための自己学習の課題などを提示する必要がある。

キーワード：シラバス、アクティブラーニング、学習コミュニティ、暗黙知、授業設計

1. 「シラバス」の重要性

(1) シラバスの重要性① 参加者はどう受け止めるか。

「シラバス」を見れば、その授業はどのように展開されるか、専門家でなくても（学生でも）おおよその事は分かる。学生（消費者）はA4版などの様式の各項目に、パラパラと記述してあるパラパラ「シラバス」を見れば、この「シラバス」を読んでも仕方がないなと思い、担当教員（もしくは学校当局）は、

この授業に思いをこめて取り組もうとはしていないなと感じる。必修科目などでどうしてもその科目を取らなければならないなどの場合は、まあ、適当に付き合っておけばいいかと思う。選択科目なら、そういう科目は選択しない。

学生達は慣れてくると、そんな「シラバス」しか載っていない「シラバス（集）」など見る必要もないと見もしなくなる。そもそも、その程度の授業しかないなら、何の科目をとっても良いから、なるべ

く登校する日を減らすよう、同一曜日に開講される科目を必要最低限で選択する。そして学校に来なくてよい日はバイトを確り入れて、遊ぶ金を稼ぐ。

学生達はこういう経験を重ねると、自分が「学びたい」内容を「学ぶ」ことで新しい発見があるだろうとか、人生が広がるなどとは考えなくなる。考えるとすればその科目の成績評価が甘いか辛いかだけである。学生達はこういう経験の中で、結局は「学ぶ」とか、「そのために学校に行く」ことに価値はないという経験則を身に着けて行くことになる。学校は不毛だという経験則を身に着けてしまう、最初の本格的なキーは、開講担当教員が参加予定者に伝えるメッセージが記載された「シラバス」である。

本来、「シラバス」は、学習（支援）への期待もあまりない人（高卒者）や、明確な学習理由を持った人達（社会人）に、当該科目を履修することによって、どれだけの成長と未来への展開が開けるか、その学びの過程がどんなに「楽しい」ものであるか、などの「学び」の魅力を強力に発信していくべきである。学習は、内容次第で学ぶ人に人生が変わってしまう。そのことを踏まえて、その最初の出会いの資料として「シラバス」は極めて重要である。

（２）「シラバス」の重要性② 教員はどう取り組んでいるか。

では、教員は「シラバス」にどう取り組むのか。通常は、教育課程全体の中で自分の担当科目が決まる。当該科目は自分自身の専門領域や隣接領域であることが多い。そこで、自分が学習（研究？）してきた内容を中心に、授業の準備（授業設計）をする。一般的に過去の研究成果を「伝える」ことを考えるので、解説書としてのテキストを用意する場合も多い。つまり伝える内容は言語で表現される範囲の、事物や現象や概念などになる。テキストを使う場合は、その伝承の内容や順序は使うテキストの目次に沿って用意する。そしてテキストの内容を覚えれば、それで良からうとどの位知識を習得したかという試験問題等で学習到達度を評価する予定を作る。これらを含めた授業計画を「授業設計¹⁾」と言う。しかし、テキスト頼りの授業設計をベースの作成される「シラバス」の多くは、テキストの目次にある内容項目が並んでいる、パラパラ「シラバス」にしかないだろう²⁾。

しかし、授業の目的、学習支援の目的はこれで良いのだろうか。「学習」の内容はなんであれ、学習の基本目標は、当該科目関連の生活上の課題や自己の

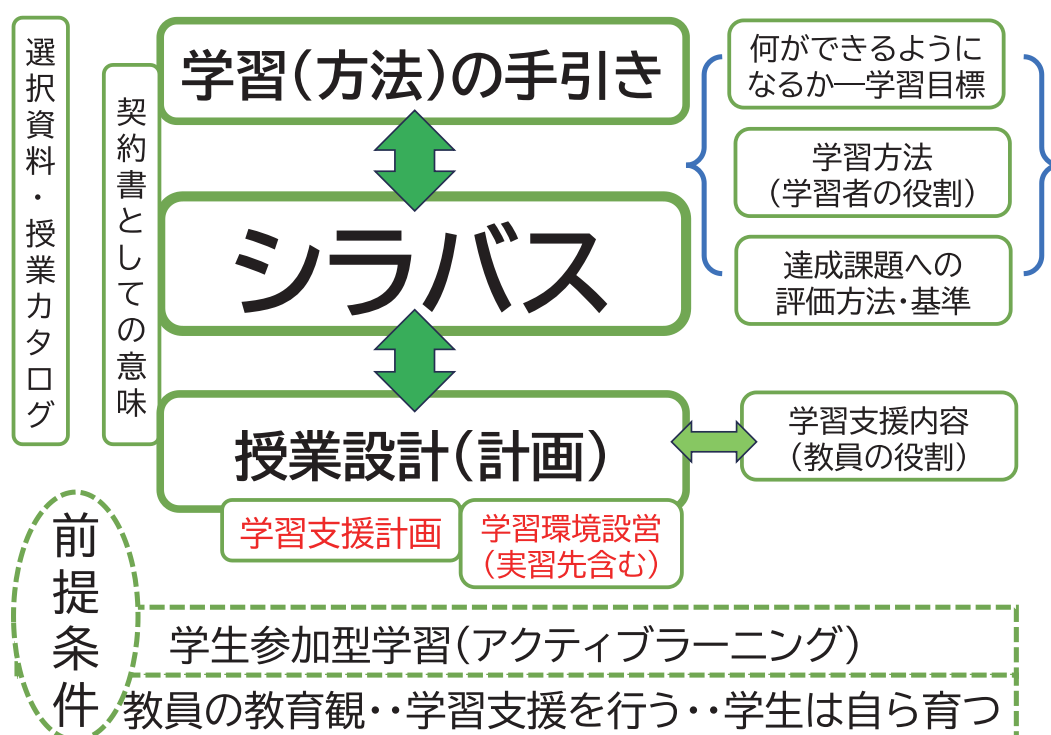


図-1 シラバス (SYLLABUS) の重要性

コントロールや社会貢献（仕事）など、「為す事」や「仲間とともに人間として生きる」ことが「出来るようになること」であろう³⁾。

単に特定の情報を「伝える」だけでは、その内容（知識）を使って何かが出来るようになるのだろうか。ほとんどの場合、そうはならないだろう。なぜなら「出来るようになる」学習の主語は「学生」であり、伝えるの主語は「教員」であるからだ。つまり「学習」主体は学生であり、何らかの活動から修得しなければ「出来る」ようにはならない。教員が言語で伝えたことを覚えても「できる」ようにはならない。

とすれば、授業は「伝える」のではなく、学生が主体的に「学習」活動を展開する場として用意されなければならない。学生に学習して欲しいテーマがある場合、そのテーマについて学生が学べるようにするには、周知な計画的準備が必要である。

まずは、少なくとも当該科目は、学ぶ学生が学んだ内容を生活の中で活用出来るようになるのだという、基本的な前提を提示する必要があるだろう⁴⁾。その上で、「学ぶ」のは学生自身であり、ただ人の話を漫然と聞いているだけではなく、学ぶ人が自ら動かなければ修得できないという事を明確にしていく必要がある。

その上で、では、どう学ぶのかその適切な方法を提示していく必要がある。この学びの目的と内容と方法、更には「〇〇が出来る」様になったかどうかの評価方法も含めた授業設計が必要になる。こういう授業設計をベースの作られる「シラバス」は、その科目ごとに最も適切な表現方法になるので、多くの場合は小さな枠には嵌り切らないだろう⁵⁾。

(3)「シラバス」の重要性③ 言語概念と現実の結びつき（建前と本音）

しかし、日本の現実の「シラバス」の大多数は、残念ながらこういう夢のあるシラバスは滅多になくて、パラパラ「シラバス」（授業概要）が殆どである。要するに当該授業は、覚えても使いようない知識を試験用に覚えるために伝える、不毛な時間でしかないという事を示してしまっている。こうなってしまっている原因に関しては、佐藤郁哉が「大学改革の迷走」と言う本の中で鋭く指摘をしている⁶⁾。結

局は、大学の教学運営システムそのものに問題があるという指摘なのだが、この指摘は、「シラバス」が正しい加減に扱われる原因にも関わる、間接的に非常の大きな問題を指摘していると筆者は考えている。

それは、「シラバス」は単なる一片の書類の過ぎず、その内容は現実を表していなくても仕方がないという現実（端的に言えば一種の「ウソ」）を容認しているということである。本来「言語での表現内容」は、その言語表現の現実的内容を示しているはずである。しかし、「シラバス」も又、そうではない単なる建前としての有効な意味を持たない「書類」でしかないという事である。この現象は、日本社会のそこそこ（特に行政システムに近いほど）で見られる現象である。建前としては、書類は現実を示していることになっているのだが、実際は、書類は書類で現実とは違うのがあたり前。建前と本音は別、使われている単語は単語でしかなく、現実を反映してはいないと言う事であろう。これでは本物のコミュニケーションは難しい。こうなると人間同士の言葉がリアルな現実として通じないという深刻な現実を生み出すことになる。こういう空疎な言葉のやりとりからは、現実社会で様々な問題の本質的な解決が難しくなる。言語を媒介としたコミュニケーションが中心の授業は、教員と学生のコミュニケーションが成立しているのかおぼつかなくなる。ただでさえ内容の乏しいパラパラ「シラバス」はこうなってくるとほぼ全く意味をなさないことに成ってしまう。これでは、授業は始まる前から既に崩壊しているとした言いようがない。

授業を一つの商品と考えれば、中身のない商品は売れないのである。それゆえに少なくともそれなりの研究を踏まえた中身のしっかりした学習ガイドとしての「シラバス」の作成は非常に重要な課題となって行くだらう。大多数の高等教育機関での授業等での学習の社会的有効性に関し、多くの人が疑問に思っている現実を踏まえると、今後然るべき「シラバス」の提示なしには高等教育機関の成立や存続は難しくなるだろう。が、残念ながら、この事に気が付かない人たち（教員や学校関係者を含む）も少なくないし、気が付いていても、新たな教授法の学習が必要な取り組みが行わず、自分が楽な伝承教育しかない人（教員）も多い。

(4)「シラバス」の重要性④ 望ましい「シラバス」・例示・

では、有効かつ適切な「シラバス」とはどういう物であろうか。「シラバス」は、当該科目が何をテーマ（目的・内容）にしている、どう学ぶかを示唆しているものでなければならない。特に、その学びのテーマが持つ科学的有効性や重要性、それを学ぶことの面白さや楽しさがしっかり確認されている必要がある⁷⁾。この点は、その教員がそのテーマにどれだけ面白味を感じ、取り組むのを楽しんでいるかを示すことになるので、学生はその後ろ姿から学ぶことになるという意味でも重要である。

更には、当然のことではあるが、その授業での学習を通じてどのようなアウトカムを得られるのか。何が達成課題なのか、について、はっきりさせていくとも必要である。

つまり学習をするということは、その学習を行うことによって何かができる、つまり、生活を変えることができるようになるということである。これができなければ、そこでの学習は、その人の人生にとって全く意味を持たないということになる。様々なことについて非常に忙しい現代社会で、そういう無駄な時間を使っている暇はない。従って、当該科目での学びの目的について、しっかりした情報提供が必要である。その為の学習過程が「暗黙知の形式知化（言語化）という」流れになるというポイントをしっかり確認すると同時にその過程をたどることで自分の生活を変えられるようになるという学習成果をしっかり想定しておくことが非常に重要である。

そのためには、(学習者・学生が)何を使ってどう学びを深めるか、学習支援者（教員）としては丁寧な準備が必要である。特に毎回の授業で取り上げるテーマは、そのテーマに関わっていくために学習者が準備すべき内容や方法、教員からのサポートの内容や方法、そして、特にこの学習コミュニティ（クラス）の運営方法などとの関連についても確認しておく必要がある。

そして、言うまでもなく重要なのは、当該授業が求める水準に達したかどうかを見る、評価基準や評価方法である。この内容は具体的でわかりやすくなければならない。勿論、当該科目の学習の達成課題への到達度を評価するのだから、出席率などで評価

されるのはあり得ない。(クラス・コミュニティへの貢献度での評価は出席率とは異なる。)

この様な内容をまとめた準備資料「授業設計」を、学習者向けに解りやすく表現されたものが、「シラバス」の基本形である。従って、「シラバス」はその前提となる授業設計の内容を反映しており、その意味で「授業設計」は非常に重要な意味を持つ。

2.「シラバス」作成の前提条件

表現される「シラバス」の重要性について触れたが、この表現には、本論冒頭で示したように前提条件となる学習支援（授業）への学習支援者（教員）の姿勢（考え方）が様々な意味で表われてしまう点に関しても注目しておく必要がある。その姿勢とは、第1に「学習」をどう考えているかであり、第2に「学習支援」をどう考えているかであり、第3に「学習者」と「学習支援者（自分）」の関係をどう理解しているかと言う事であり、第4に「学習者同志」の関係をどう考えているかである。

(1)「教育」と「学習」支援をどう考えるか。

「シラバス」の作成の基礎は、学生の学習支援をどう考えるかである。授業は学生の「学習」の場であり、学習主体は学生であって、教員⁸⁾ではない。その考え方がいいかんでは、「シラバス」を作成は意味のない行為になってしまう。日本において「シラバス」が活用されない一つの原因は、学習主体は学生だという点を無視してしまう、従前からの伝統的価値観の問題点に気が付かないという問題が大きい。

従って、「シラバス」作成の前提となる考え方としての「学習支援（教育）」とは、「学生が学ぶ支援」をしていくことである。間違っても、何かを教え込むこと（＝教育？）ではない。「生物」である人間の知識的な営みを言語と論理を中心に反応するコンピューターと同様に捉えて、学生を覚え込む客体ととらえ、学生に何かを覚えさせる（知識を詰め込む）ことを「教育」と考えるのは大変危険な考え方である。「人間」はそんなに単純な生物ではないし、そういう「教育」を行うなら「シラバス」を作成する意味はない。人間は（もしかしたら他の動物も）自分が学びたい、必要だと考える事を自分から様々な工夫して学んでいく存在である、という学習支援観が

「シラバス」作成の前提要件である。

このように考える時に、改めて「教育」という言葉と「学習」支援という言葉の内容についての違いをしっかりと確認しておくことが必要であろう。通常はほぼ「教育」という言葉を使って語られているので、誰かが誰かに学習者にとって未知の情報（事実や概念など）を、伝えたり解説したりすることを「教育」と言っている場合が多いだろう。

しかし、学習支援というのは、教員が何かを学習者に伝えるということではなく、学習者が自ら何かを修得して行く、できるようになっていく、身に付けていく（覚えていく）という事を、支援するという学習支援である。つまり、「何かを伝える」ということが学習支援なのではない。学習支援というのは、あくまでも学生たちが自ら発見し開拓して何か解かり出来るようになっていく学習過程の支援を意味するのであって、そこには「教育（伝承）」と言う行為とは、大きな違いがある⁹⁾。

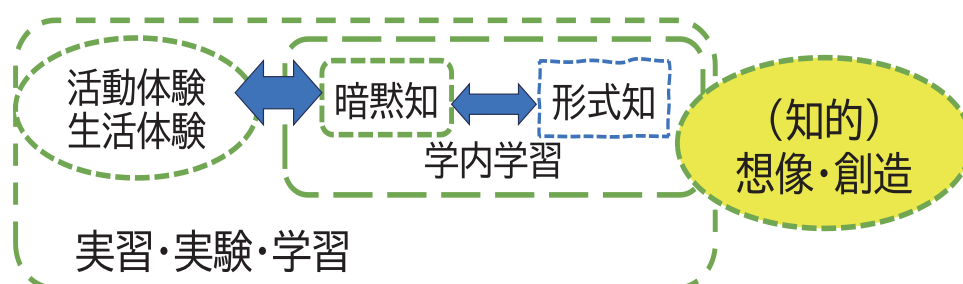
多くの場合、殆どの教員は自分が「教育」をする人と思い込んでいるので、概念として「学習支援」の重要性を理解していても、つつい「教育」をしてしまいがちである。だが、教員が行なわなければならないのは、教員中心の授業（教育）ではなくて、学生中心の授業（学習支援）を展開しなければならない。だからこそ「シラバス」が必要であり重要なのである。

（２）「学習」をどう考えるか。

では、授業展開を考える上で、「学習」をどうとらえたら良いのであろうか。諸説あるが、特に実学（生きていくために役立つ学習支援・職業学習支援など）を中心に考える筆者の理解は、以下のとおりである。

人間の学びの過程は、図－２に示すように、様々な五感をともなう体験（コンピューターには出来ない！）を踏まえての「暗黙知」を、言語表現が可能な「形式知（思考回路（論理）を含む）」に代えていく過程と言ってもよいだろう¹⁰⁾。このように生活体験や暗黙知の裏付けのある「形式知」に言語化することによって、その言語を使いながら様々な論理的組み立てを行うことで、新たな問題解決の取り組み、創造的な対応が出来るようになる。

従って、暗黙知は存在しないITの世界と、人間の思考の世界は全く違うし、ITを教育するという意味では（此处で触れている）シラバスは意味をなさない。いうまでもなく人間にとっては、五感をともなう体験を踏まえた暗黙知を前提としないで「形式知」（品名や概念や論理）だけを教え込まれても、（パラパラ「シラバス」ベースの授業など）ほぼ忘れられてしまうし、現実場面で暗黙知を踏まえない形式知は使いこなせない（誤った使い方をしてしまう）。その為に、せっかく覚えても、日常生活の様々な場面での現実的な問題解決には、取り組めないで行き詰まってしまう。特に、変転の激しい現代社会では、次々と現れる新たな生活課題にその人の力量で取り組んでいかなければならない。とすれば、生活（現実）体験⇔暗黙知⇔形式知を繰り返し練習し確認していくことで問題解決能力を高めていくことが最優先課題となるであろう。其処ではもちろん人類が積み重ねてきた叡智は無視されるわけではない。しかし、その叡智を形式知で暗記するのではなく、適切に活用される素材として学んでいく対象になっていく。近年「AIに聴いてみる」という傾向が強いが、AIの回答の多くは、暗黙知の裏付けのない形式知の組み合わせでしかなく、一見綺麗にまとまっているようでも現実的に有効性に関しては、疑



図－２ 授業・学習の展開

わしい場合が少なくない。

とすれば、人間の成長や学習支援には、どういう五感をともなった体験をするか、そこから何を感じ、思い、考えて「(総合的) 暗黙知」を得ていくのが、極めて重要になる。さらに、この暗黙知を言語で表せる形式知に転換していくプロセス(論理化)も非常に重要である。

この様に考えるなら、「学習」支援とは、この五感をともなう体験から暗黙知へ、暗黙知を形式知として(論理的なプロセスを踏まえて)整理していく過程を、「学習」と考え、授業などでは、それを支援していくとことだとも言える。

とすれば、学習の基礎となる活動体験や生活体験をどうするかが課題となる。特に、人間生活が、リアルな自然環境から切り離される傾向が強くなり、結果、生活体験の巾が非常に狭くなっている学習者が多い中で、どのように学習支援をすすめるかが課題となる。

(3)「学習」支援における環境設営の重要性

暗黙知を得られる体験を適切に行っていくためにはそれなりの準備が必要である。つまり、学生たち自身も、なんらかの体験を暗黙知として、その暗黙知を形式知化(言語化)することを前提として取り組むのであれば、暗黙知を意識的に得られるような体験を行うための準備が必要である。

準備は二つあって、第一は、暗黙知を意識的に得られるような体験をどう提供するかという事である。体験を行うためには、危険が発生したり、道具が必要であったり、いろいろなことがあるわけだから、そういう準備が必要である。第二は、暗黙知を形式知化(言語化)をするということであれば、その前提としての既存の概念(形式知)に関し学習をしておくことが必要であろう。

この二つの準備を行った上で、五感の体験から得られる暗黙知を意識し、それを形式知化することを結び付けていく学習の展開を支援する。このプロセスに向けた準備を行うことによって、暗黙知を形式知化(言語化)し、その言語を使って概念の操作を行っていくという可能性がでてくるのである。そして、それを使いこなすことができるようになることによって、その授業を受けた後、自分の生活を良い

方に改善して行くことができるようになる。あるいは効率的に何かをこなしたり、さまざまな関心が広がったりする。そういう意味での展開が可能になるということである。

この様な展開のためには実習や実験授業が非常に重要になる。また、日常生活の中での五感を活用した体験を意識させておくことも非常に重要である。都市生活者や、IT 機器への接触時間が長い人は特に、様々な体験を意識化(暗黙知化)できていない場合が多い。

このような事前の準備から、授業中の展開、終わった後にその関心が広がったりという発展的な展開を含めての一連の流れを、アクティブラーニングと言う。単に授業時間中に発言すべき内容について準備もしていない学生同志のディスカッションを行うというのは、アクティブラーニングとは言い難い。

環境設営を行う時、人が成長していく過程で「体験」してきた「環境」も活用していくのは当然のことである。五感をともなう物的環境としての自然環境や人間関係環境や居住環境は大きな意味を持ち、人間は様々な体験をし、暗黙知を得ていく。特に他者から大切にされるかどうかの体験は、その暗黙知が人生の大きく影響していく。特に幼ければ幼いほどその影響は大きい。様々な場面で、上手くチャンスに出会えばその体験を暗黙知として修得し、更に適切なアドバイスがあれば、学びを「形式知」として言語化していくだろう。形式知化できない場合でも暗黙知は体が覚えている(例えば、自転車に乗る(体を適切に使いこなす)ことができる。冗談と本気の区別が出来る。)だろう。また、長ずるに従って、一定の形式知化が進むため、五感の影響の比重は減っていくし、近年は五感の一部しかともなわない(具体的な体験をともなわない)画像や映像などから得る体験の量も増えている。この場合は、五感をフル活用できないので、触覚や嗅覚や味覚などで体が覚えるという側面は極めて少ないため、暗黙知は偏ったものとなる可能性があるので、その暗黙知を補正しておかないと、そのまま活用しても問題解決に適切にはつながらない(時に現実的ではない)。

しかし、様々な学びの中では「形式知」として学ばざるを得ない内容も多い。その場合も「体験」⇔「暗黙知」⇔「形式知」の学び体験の質や量が、その

形式知（言語・概念・等）に関する想像力の違いとなっていく。近年、日本では特に「形式知」（言語表現）から「体験」を想像していく力が乏しい人がすくなくなく、他者の話（表現）の内容の理解が浅いため、人間関係の形成が上手く進まないなどの現象が見えてきている。例えば、乳幼児期から青少年期までの間に、多様な人々との接触経験が少ない人は、長じて他者への理解が乏しいなどの傾向になりやすい。

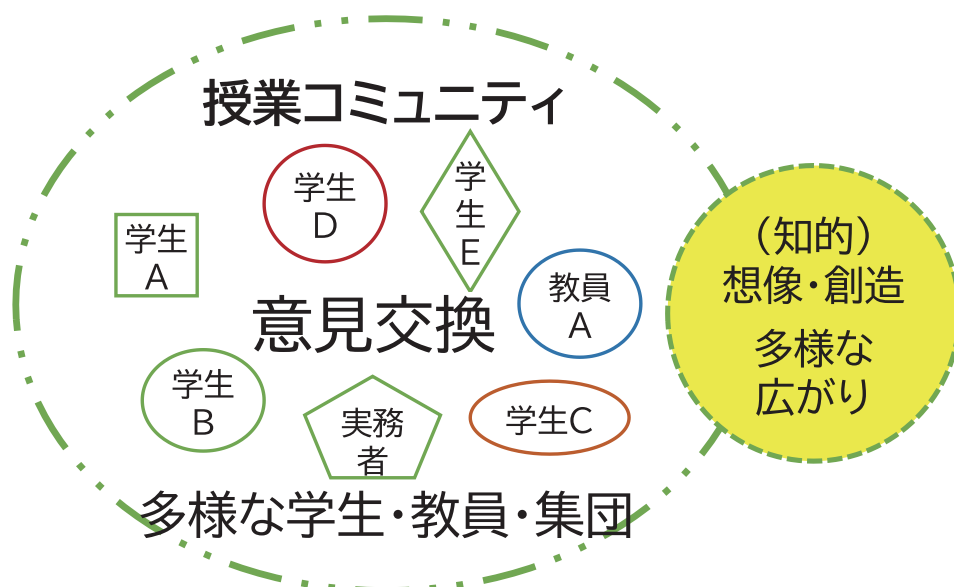
とすれば、学習支援とは、どのような生活体験の場面と環境を提供するか、既に体験してきている沢山の暗黙知をどう活用するか、その環境設営に他ならないとも言える。学習の発展段階によって、提供されるべき適切な環境が変化していくのは当然である。当然のことながら「授業」の中で、この現実「体験」と言う環境をどう設営していくかは大きな課題となっていく。その意味で「実習における学習支援」はとても重要である。しかし、ただ実習時間を長くすればよいというのではなく、その実習における体験から得られる暗黙知を適切な形式知として構成していく支援が欠かせない。このような意味で、日本ではあまり実習を大切にしない傾向があるが、特に職業教育では、重要な課題である。

そして、その意味で、高等教育段階で提供される「学習支援」「環境」が表現されている最も象徴的なものが「シラバス」であると言えるだろう。

（４）「学習者」と「学習支援者（自分・教員）」との関係

この場合に、考えなければならないのは、学生たちと教員の関係である。つまり、学生たちと教員の間を、学生たちの成長（教員自身の成長）を目指す、共同学習の仲間と言うふうにかけるのか、それとも学生達は教員の言うことを覚えていく存在という理解なのか、この二つの考え方のどちらで授業を構成するかで、結果は大きく違ってくる。前者の場合は、学生同士のコミュニティが授業の中に取り込まれていき、更に教員を含むコミュニティが構成されていくだろう。しかし、後者の場合は教員対学生であって、少なくとも教員と学生のコミュニティが形成されることは無いし、学生たちも相互に競争関係に置かれるため、実質的なコミュニティが構成されることはない。

言うまでもなく、人が成長して行く時、どういうコミュニティの中で成長して行くということは非常に重要であり、一人の教員と学生の間だけで学生が成長して行くというのは非常に少ない。出来るだけ多種多様な人々とのコミュニティの中で、忌憚らない意見交換から、自分の暗黙知を自覚させられたり、形式知の妥当性を確認したりする中で、学生は成長して行く。色々な人が、それぞれの多くの事象への対応などの体験を踏まえての、「図－３ 授業コミュニティ」に示すような様々な意見があったり



図－３ 授業コミュニティ

するコミュニティの中での成長の方が、はるかに成長のスピードが速いし、修得度も高い。

このような学生たちのアクティブな活動の展開を前提とする「学習支援」が展開されるには、改めて、教員と学生との関係を、教員がどう考えるか（それが「シラバス」にどう表現されいえるか）もとても重要である。なぜなら、教員が、自分が授業の主体で学生は客体（教え込まれる存在）だと考えていれば、殆どの学生は教員と争いたくないし、黙って従っての方が当面は楽なので、学生はそれに合わせた対応を取ってしまうからである。実態としては、利用者（弱者）に対し強者（決定権者）であるべきではないという、医療におけるインフォームドコンセントの考え方（実際には上手く行かない場合が多い）の実態などを参考に、教員－学生関係を思い浮かべると解りやすいであろう。

此処まで述べてきたように、教員主体という考え方や行動は有効な学習を展開していくには不適切である。学生が有効な学習を展開していくためには学生が学習主体とならなければならない。教員は、ある種の助言者（ファシリテーター）であろう。

では、どうすれば、教員は適切なファシリテーターとしての役割を果たせるのであろうか。

（５）「学習者同志」の関係をどう考えているか

このファシリテーターとして教員の第一の仕事は、学習者同志のコミュニティ形成への支援である。学習の主体は学生であるというのは論を待たないとしても、その成長は多様な仲間との意見や情報を前提としてその議論の適切な展開を前提としている。従って、個々の学生の違いを競争関係で捉えないという考え方が非常に重要になる。

ただし、現実的な問題としても、学生が適切なコミュニティを経験していない場合が多い。一見親しそうに見える友人関係も、時には、自分を「いじめ」から防衛するための（従属）関係だったりする場合もある。期待される学習コミュニティの行動として、D.W.Johnson 等は、その著「学生参加型の大学授業」の中で、「協同学習」が成り立つための条件として、

- (1). 互恵的な相互依存を明確に認識している事
- (2). (対面的で) 促進的な相互交流が相当にあること

- (3). グループ目標を達成するうえでの個人の責任（個別の責務）を自覚していること

- (4). 対人関係技能や小集団活動のための社交技術を適切な頻繁に使用していること

- (5). 継続的・敵機的に協同活動評価を行うこと¹¹⁾

が求められている。しかし、授業の中でこのような学習コミュニティを形成していくには「シラバス」に何を表現するかを含めて、それなりの準備が必要である。

繰り返しになるが、知的創造を伴う学習は個人個人が単独で、一人で勝手に行えるものではない。学生同士はお互いに役割を持った協力関係を形成し、適切な助け合い、相互の刺激し合いの中から新たな知の発見や創造という「学習」を行うのである。このような展開を行うためには、教員は、特にこういう授業展開のコツを習得するまでは然るべき準備など、相応の手間暇がかかる。ある意味で教員は、テキストの解説をしての方が楽と言う事もあるかもしれない。しかし、そういう授業は多分、何も生みださない。それどころか「授業」という「学習」はオンデマンドで十分だから、対面の授業に出る必要はないという体験を学生に植え付けるだけであろう。そうではなく、対面の授業に置ける共同「学習」は有効であり成長の実感を味わえることを教員も「学生」とともに体験していくことも重要である。

この点について、D.W.Johnson 等は前掲書の中で、授業における学生コミュニティの学習の有効性に関して、「協同」と「個別」と「競争」という学習タイプを比較して、「協同」学習がもっとも高いとする研究成果を示している¹²⁾。この結果は、筆者の教員体験からも裏付けられる¹³⁾。

また、いささか情緒的な言い方になるが、学生の協同的コミュニティが形成されているクラスの授業は、教員と学生での忌憚のない意見交換もできて、教員も学生の発言から学ぶ点や発見も多く、とても楽しかった。学生も授業時間の延長を全く気にしないくらい討議を楽しんでいた様に思う。情緒的ではあれ、このように「授業」や「学習」の中で新たな知見を得られたり、そのことが自分の生活の変化や向上に繋がったりすることが「楽しい」と感じることは、その学生の自己肯定感を高め、他者との肯定的人間関係を作りやすくなり、未来志向の開拓をい

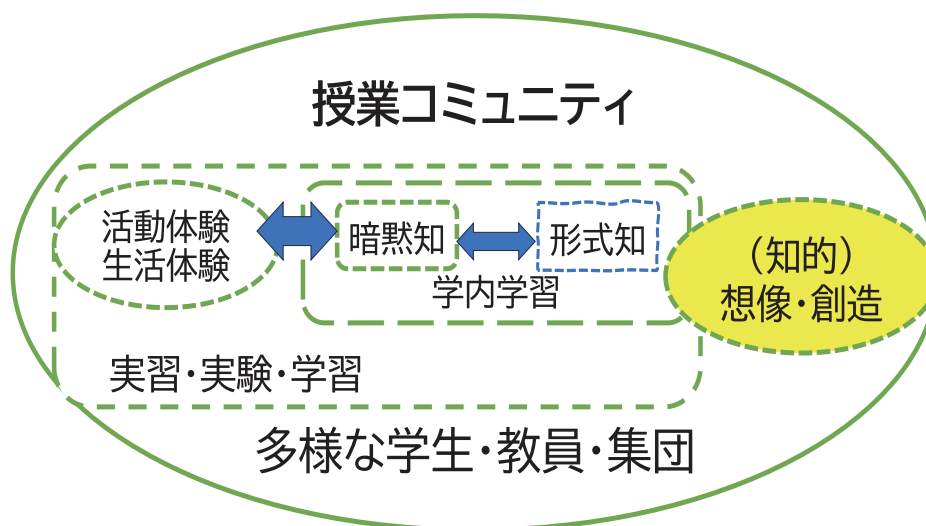


図-4 授業コミュニティと学習の展開

とわれない傾向を助長するという意味で、非常に重要な体験であると言える。

一方、競争的な関係での発展の速さを指摘される場合もあるだろうが、それが必ずしも良い結果を生まないというのは、アメリカ社会の分断などに見る様に、人類にとって良い結果になっているというのは、多数の識者の指摘するところでもある¹⁴⁾。

このような共同学習体験が出来る授業を展開するには、まずは(対面的で)促進的な相互交流を行わざるを得ないような授業内容を構成し、それに合わせて、当該授業に参加する個人の責任(個別の責務)の部分でもある事前の学習課題などを具体的に提示しておく必要があり、まさにシラバスの出番である。

このような学習体験に不慣れな学生に積極的に参加してもらうには、授業の最初にグループでの学びの効果や楽しさについて、練習を含めて丁寧なガイダンスを行う事、個別対応が必要な事前課題はなるべく(暗黙知につながる)具体的行動を伴う内容にすること(こうすることで言語での学習(暗記など)が苦手の学生も対等に参加できる。)、討議を行う段階で討議の進め方について丁寧なガイダンスを行い、グループメンバー全員が(事前課題を踏まえて)何らかの発言を行わなければならない様に進めていく、などなどの配慮が必要である。

3. 今後の「シラバス」への期待

以上、「シラバス」がなぜ重要なのかについて、幾つかの視点から触れてきた。しかし、以上述べてき

た内容は「授業」の在り方ではないかという読者もおられるであろう。確かにそう考えるのはある意味当然である。なぜなら、「シラバス」はその授業に関するファシリテーターとしての教員の考え方を色濃く反映するものだからである。こういう時間を一緒に過ごすことで、共に新たな(参加者個々人にとっても社会にとっても有用な)知の創造を行おうという、楽しそうな夢のある呼びかけが、「シラバス」なのだとも言えるのである。そう言う授業を教員も楽しんでいなければ、学生にとっても「楽しい授業」とはならないし、「学習」の楽しさや「有効性」を確認する場にもなって行かないだろう。

高等教育機関でかつて行われていた「講義」という形態の授業は、IT機器の発達した現代ではオンデマンドでの情報提供に置き換えられているので、わざわざ学校に出向いて聴講する必要はない。とすれば、まさに高等教育機関での「授業」は、一種の研究機関であるとみなされている大学など高等教育機関として、ある種の創造的研究開発の演習と言う性格を持つのは、当然の必須要件である。従って、その課程を修了するということは、自己学習を踏まえて一定の問題解決などに創造的力量を有するという証明でもあろう。

この点に関しては、日本の現実の大学で考えると少し現実とは異なるかもしれないが、国際的な大学の一般的水準で考えれば、標準的な理解ではなかろうか。

以上の様な理解を踏まえて、改めて高等教育機関

の置ける「授業」を図解化してみると、図－4の「授業コミュニティと学習の展開」に示されるような構造になるのではなからうか。

この図はある意味でアクティブラーニングの構造ともいえる。つまりは、以上のシラバスの重要性や要件は、アクティブラーニングの要件とも背景となる社会観ともいえるだろう。と言う事は、授業を学生（と教員）の成長に役立つアクティブラーニングとして展開しようとすればこそ、「シラバス」は重要なのである。裏返せば、いわゆるパラパラ「シラバス」はその授業はアクティブラーニングではない（学生の成長へに寄与の度合いは非常に低い）ということを示していることになる。（こういうことを平気で表現している高等教育機関（大学）に、数百万円と4年もの年月をかけて、日本や世界（留学生）の若者は挑むのであろうか。）

冒頭に示したように「シラバス」は、当該授業（授業料だけで4単位1科目15万円位か）のカタログでもあり、選択資料でもある。教員と学生間の契約書としても、教員は適切なファシリテーターとして表示している役割を果たすと同時に、学生もコミュニティメンバーとして「シラバス」に示されている役割を果たさなければ、終了単位は認められないのである。今後、高等教育機関が発展していくためには、当該学校は以上の様な「シラバス」を示す必要があるし、教員はそういう「シラバス」を作成できなければならないであろう。

なお、「シラバス」がどういう内容を持つかについて、細かい点については本稿では触れていない。この点については、稿を改めて報告することとしたい。

《注》

- 1) 中島英博編著「授業設計」玉川大学出版部2016年などを参照。
- 2) かつて1960年代頃の大学の学生たちは、テキストがある授業には当該の先生に魅力がない限り、あまり出席しなかった。テキストを読めばわかる内容なら、授業に出る必要はないという訳である。当時の大学では要するに期末試験やレポートでパスすればよいので、出席状況での基準はなかった。
- 3) この点については、ユネスコ21世紀教育国際委員会(1993-1996)が報告している「学習の4つの柱」・「学習－秘められた宝」Learning: The Treasure within の中で ①知ることを学ぶ (learning to know) ②為すことを学ぶ (learning to do) ③(他者と)ともに生きることを学ぶ

- (learning to live with others) ④人間として生きることを学ぶ (learning to be) として「学習」の目的を明示している。
- 4) 今後、明確な学習ニーズを持つ（社会人などの）学生が増えてくれば、当該授業の今後の生活や人生への有効性を問うことは当たり前になって行くだろう。
 - 5) こういうシラバスは、A4版でも10ページを超える（中島英博編著「授業設計」玉川大学出版部・第6章など）と指摘されてる。筆者の知る米国の大学の SYLLABUS もかなりのページ数であった。
 - 6) 佐藤郁哉著「大学改革の迷走」（ちくま新書）pp.33-86
 - 7) この重要性や面白さが、シラバスの冒頭にその学びへの招待として書かれていることが望ましい。ある意味で教員の取り組み姿勢を示すことにもなる。
 - 8) 教員もともに学ぶという意味では、教員も（教育主体ではなく）学習主体の一員であるという理解もあり得る。現に、教員も学生とともに学ぶ仲間として共同で学習研究を行っている例もある。
 - 9) この「教育」という用意を使う事による「学習支援観（教育観）」の混乱については、田中萬年著「奇妙な日本語『教育を受ける権利』誕生・信奉と問題」（V2新書・星雲社）が詳しく論じている。
 - 10) 生活（現実）体験⇔暗黙知⇔形式知という筆者の考え方は、野中郁次郎・竹内弘高著「知識創造企業」東洋経済新報社の主に第1章「序論－組織における知識」にヒントを得ている。
 - 11) D.W.Johnson R.T.Johnson K.A.Smith 著 関田一彦監訳「学生参加型の大学授業－協同学習への実践ガイド」p.55
 - 12) D.W.Johnson 他、前掲書 pp.42-68
 - 13) クラスの学習コミュニティに協同的關係をうまく創れた時は、うまく行かなくて個別学習中心になってしまった時と比べ、当該クラスメンバーの国試合格率が優位に高い傾向があった。
 - 14) マイケル・サンデル トマ・ピケティ（2025）「平等について、いま話したいこと」早川書房、等多数の文献、論文がある。

《引用・参考文献》

- * 中島英博（2016）「授業設計」玉川大学出版部
- * 川廷宗之（2018）「専門職大学の課題と展望」ヘルスシステム研究所
- * 佐藤郁哉（2019）「大学改革の迷走」（ちくま新書）
- * 田中萬年（2017）「奇妙な日本語『教育を受ける権利』誕生・信奉と問題」（J-V2新書・星雲社）
- * 野中郁次郎・竹内弘高（2020）「知識創造企業」東洋経済新報社
- * D.W.Johnson（1991）Active Learning:Cooperation in the Classroom,1/E（関田一彦監訳（「学生参加型の大学授業－協同学習への実践ガイド」）
- * マイケル・サンデル トマ・ピケティ（2025）「平等について、いま話したいこと」早川書房

受付日：2025年11月10日